方向　第三三号　一九八四年十月十日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

わたしの兵隊手帳（一六）

赤谷明海

〈昭和二〇年十月二十九日の項のつづき〉

○十月も余すところ二日。さすがに朝方は寒くなつて来た。だが全体的には最もしのぎ易い気候であり、申分がない。内地も今が最好期。この秋に逢へないのは淋しいが、以前程焦〈焼〉けつく様に帰郷の事を考へなくなつた。すぐに三十一才を迎へる様な頃となり、二年近い間苦しい恵まれない生活ばかり続けて来た事等も、左程切実に考へる事なく、ただ漠然茫然とその日を送つてゐる。（一〇、二九）

○階下へ来てから（護送になつてより）第二回目の診断。血圧が計られ一一〇であつた。高いのか低いのか自分には判らぬ。食欲は大分出て来たが、少し硬い飯になるとすぐ胃の腑が張つて腹が減らない。肛門からの出血は相変らず続いてゐるが、追々良くなつて行く様な気がする。然し肢の方は以前よりも重く、力が全然入らない。階上へ戻る事に就て婦長殿と上の衛生兵との話合があり、愈々近日中に上れる見込が立ち、嬉しくはあるが、かう足がだるくては或は亦北野班長殿に迷惑をかけるかもしれないと心配でもある。（一〇、三〇）

○昨夜〈十月二十九日夜か〉も眠れなかつた。種々の想念が次から次へと、漠々として絶える事がなく、一度こ

の様な状態に入ると、如何に無想を得んと求めてもなかなか困難である。以前は他愛もなく、甘いもの、果物、魚等食べる事をしばらく想つてゐる間に眠れたものであるが、この頃は、その種の事を想つてへは〉食欲を盛んにしようと努めるのだが、どうも興が乗つて来ない。現在の自分の身体が果して故郷に一歩を印すまでもちこたへられるかどうかも判らない状態ながら、後送を待つ心がかくあらしめるのか、帰還後の生活のプランが最も屢々念頭に浮んで来る。

昨夜は招提寺で生活する場合の事に神経をたかぶらせてしまつた。先づ諸堂建立の事。それは十余年前へ昭和九〜十年〉、加行へけぎょう・受戒前の修行〉中の若者が、宝蔵の横の石に腰をかけては、何時までも復興後の招山を夢に画いてゐた、あの頃に連繋する。

▽礼堂内陣の復原　へ礼堂は解体修理後、旧来と変り、種々問題あり。〉

現在の釈尊を移安。日供舎利のみとし、東を正面とす。鼓楼は勿論舎利殿であり、舎利を階上に移し、階下は鼓楼を兼ねしめる意味、又は鐘楼と相称へ左右対称〉する伽藍配置からも、太鼓を置くのが一策である。さて礼堂の釈尊をどうするか。食堂へじきどう・僧堂〉再興後その本尊としては如何。然しそこには教義上の問題が横つて来る。それには講堂の弥勒如来の形相は舎那仏へるしゃな仏〉の印相へすがた〉を具へてゐないか。さすれば金堂の法身へほっしん・仏〉、講堂の報身へほうしん・法〉、食堂の応身へおうしん・僧〉と三身具足し三身即三戒の教義（『釈門帰敬儀』『始終戒要』）を表すこととなる。但しこれは研究を要する。

▽開山堂再興　へ現在開山堂は教学院の位置に建っている。〉

旧場所へ移転、前庭の整備。様式は焼失〈幕末に炎上〉前を復原、障子絵等も復〈旧〉と同様にする。而して現在の開山堂は不空羂索堂として原始に復す〈る〉か、或は諸祖堂（中興和上、歴代位牌）とする一案。

食堂再興

旧礎石上に建立し、法会の際の衆〈集〉会所にし、平素は、現在の講堂が霊宝殿の様になつてゐるのを、此の堂へ移す。内部の様式に就いては諸寺のそれを参照し、名の如く正式の食作法をも行へる場所とす。

▽地蔵堂付近の整備　〈現在、地蔵堂は後方へ移転、修理されている。〉

惣庫〈そうぐら〉の修復。地蔵堂東側を通る西門への道新設。これについては熟考を要する。

西室〈にしむろ〉再興

出来得る限り東室と様式を同じうする。前半は祈禱所とし、現金堂内の〈厨子入〉千手観音が本尊。堂内は真言式も可。加行道場を兼ねる。現今諸寺の祈禱所を参考とし、信者を糾収する。後半、馬道〈めどう・コンコース〉より北が西室。東堂が復原を旨として実際の使用面を考へなかつた弊を除き、諸僧諸客の宿泊所たらしめ、学徒の静閑な房子〈ぼうす・部屋〉とする。勿論外形は東室と相対的に復古の形式を採るが、内部に於いては十分現代式を用ひ（此の際旧東室の様式を勘考の中に入れ、ぬれ縁内一間を吹放ちとするも一案）外部は障子、内部は襖、此等を除けば全部障壁なしとなる如くす。北端は大部屋。他は中央を南北に切り、八畳、十畳程度の部屋を多くとる。西側には土塀を囲ひ、東司〈とうす・便所〉を程良き位置に配す。〈次に西室再建図（平面図）を付けている。〉

▽戒壇堂復興

東大寺ニ倣フ。場域内ニ白砂。北側ニ宝蔵設置。

▽東塔整備

▽方丈建設

現弁天堂付近ニ建立。土塀ヲメグラシ、大界南側ノ大塀ニ門ヲ置キ、コノ門ハ車ヲ通ス様ニシ、方丈正面ノ前ニ至ラシム。

▽表門復興　〈現在は復興されている。〉

礎石上に復原。門番所ヲ門ヨリ少シ離シ、土産物売場、休憩所トス。

〈正に夢である。現実性に乏しい。それでも当時ひたむきに夢を追っていたらしい。〉

○十一月一日　体重測定　三五、六瓩（十　〇、七〇〇）

はや十一月を迎え〈ママ〉、明治節も昨日〈に〉送つた。昨年の遼陽での明治節も淋しかつたが今年は尚更淋しい。給養の点も何等変らず、御祝ひの形は何一つなかつた。如何に日本の皇室の権威がおちたとは云へ、明治大帝の遺徳は、今度の敗戦とは別問題として讃仰されてよい。〈明治天皇観は戦前のものがそのまま残っている〉

近頃飯の質は悪いが食欲は旺盛に近い。肛門の調子も追々よくなり、漸次体に力がついてゆく様な気がし、今度の体重測定が期待される。

今日、担送患者、護送患者の煙草が引き上げられた。同室の独歩患者十三名。担・護二十四名。従つてその集

められた数、凡そ四、五百個。食欲のなかつた以前は兎も角、今では一週一度に上る下給品のビスケットも、我々には二、三枚しか当らず、その上煙草もとり上げられたのでは余りにも口淋しい。自分の身体のためも思ひ、節煙しながら六、七種類の煙草を保存し、内地への土産にする積りだつたが、皆なくなつた。然し思へば土産など何で要らう。この身一つを大事に有へ保〻つてかへるので十二分である。（一一、四）

階上へ上れる望みも遠い将来になつた。折角階上の班長殿や軍医殿の御世話があつたにもかかはらず、下の婦長殿が、あれはまだ担送ですから（実は護送）との一語で御破算になつてしまつた。班長殿は独歩になるまで待てと云はれる。待たなくてはならない。一日も早くこの部屋の暗さからのがれたいとは、以前からの念願であるが、仕方がない。まあ気を長くもつことである。正月もここで迎へなくてはならないかもしれない。気は急くが急かしてはならない身分ではある。（一一、四）

○昨五日の診断の結果、独歩はおろか、担送に逆戻りしてしまつた。自分では追々元気になつて来るのが判るのに、かかる結果になるとは全く意外だつた。それで、班長殿からさう聞いた時、「赤谷も担送になつたのですか」と反問したところ、その返事がかうである。「なつたんぢやない。俺がさうしたのだ」と。何といふことだ。何かここにはわけがあるらしい。どうせ毛嫌ひしてゐる班長の事だから、先方にしたつて虫がすくまい。

昨夜、青山が死んだ。矢張り下痢である。食養生が悪く、水をかくれて飲んではかかる結果になつてしまつた。今、次に危いのは柴田である。彼は自分のすぐ横にゐたので種々話合ひ、趣味もよく似通ひ、久し振りに話の出来る人間に会つたと喜んでゐたが、これも食欲がなくなつてから下痢となり、全く衰弱してしまつた。この調子

では望みが薄い。今朝がた、班長殿以下数名の独歩患者と口論し、他愛もなく双方むきになつて云ひ合つた。お互に云ひ分はあり、独歩の方では世話をしてやつてゐるのに恩を知らないといかり、担送の方では何の世話もしてくれないで何かある度にいやみばかり云ふとは……と云つた訳である。聞いてゐて、自分も担送である加減か、どうしても重症患者に味方してしまふが、兎に角、一部の独歩患者の仕打ちをにくみながら、暗い部屋で死んでゆく者のあはれさを思ふへことになる。〉（一一、六）

○十一月六日午後八時二十分、柴田広君遂に死去。全く意外にその死は早かつた。その朝軍医殿の診断があつて二報へ危篤通知。三報は死亡〉が打たれ、昼食時には隊長の診断があり、「全身浮腫あるを以て注意を要す」の簡単な言葉で終つた。その時はまだ以前とは変らず、勿論衰弱はしてゐたが、急に悪化する様にも見えなかつた。昨夜へ前夜〉飯干へいぼし〉上等兵と口論したので、その朝へ翌朝〉つまらぬ喧嘩など君の恥ぢやないか、我々誰だつて腹が立つてゐる、然しこれに対する復讐の手段とては現在になく、ただ大人しくして只管自重し健康体になると云ふ、これだけが我々の出来る唯一の手段である等と云つてやつたところ、「よく判りました」「又有難い話をきかして下さい」と静かに云つてくれた。それで当座の注意として下痢を止めること、それには食養生よりないのだから、仮令へたとえ〉五分粥であつてもよく咀嚼して嚥み込む事等を云つて別れた。そしてこの会話が最後の会話となつてしまつたのである。午後三時頃、班長殿がふと声をかけた時にははや返答がなく、眼は開いてゐても視力がなくなつてゐるらしかつた。紙よりでつつけばまだ瞼は閉ぢられたが、全然口がへを〉きかず、又何も云ひたげではなかつた。そしてそのままの状態で夜に入り、何一つ云はずに息を引取つた。口さへき

けば、かねて母親を思つてゐたのだから、言伝へことづて〉にでも聞かうものを、可愛想な事だつた。彼は専修大学の専門部で政治、法律を学んだとか。家庭は寺に関係が多く、父ももとは僧侶だつたと云つてゐた。寺の雰囲気が好きで、よく田舎の親族の寺へ行つては楽しい生活を送つた事等を話してくれ、此方が奈良の風土を讃へ、自身の自然観とか生活等を吹聴したときは、心から共鳴してくれ、再会を確へ固〉く約束したものだつた。彼には僧侶となつて今後の新しい道を歩く考へもあつたらしく、自分としても一同行を得た喜びで心がふくらんでゐたのだが、遂にはかない願ひへ頼み〉となつてしまつた。今思ふことは、ただ、折を見て母親の善光寺詣りの御供をし、途中旅館を経営してゐる彼の実家へよつて、その母に始終の報告をへし〉、本人の平素の願望をお伝へする事である。（一一、八）　へおくればせながら、昭和五十二年の秋に柴田君の遺品の鋏をその兄に渡した。彼の母に会へなかつたのは残念であるが、復員間もなく野原へ来るという母の申出をことわつたのは、当時いろいろな事情があつてのこと。〉

夜来庵かぜだより　―若い日の森田曠平―　（一六）　原田憲雄編

へ一九三九（昭和十四）年〉一月五日　夜付、六日午後消印。はがき。横書き。

暮にはわざわざ来て戴いて有難う。君もよいお正月を迎へた事と思ふ。小生もどうやらこうやら年だけとつたが後はおめでたいのやら何やら分らぬ。正月に大塚先生とこへ行つたか？　まだ伊賀へ旅行中〉ではありませんで

したか。岩見へ護・三中の国語の先生。後、大谷大学教授〉先生からも絵はがき頂戴して恐縮しました。

扨、先日承つたカムライソタへ嘉村磯多〉全集　どこの本屋だつたかしら。出町のスター食堂の隣への竹村善書堂〉へあの翌日行つたが無かつた（三冊共）。主人がゐなかつたので　嫁はんではラチがアカン。ヒョット植物園のところの本屋へ丸万書店〉の間違かと思つて行つたが、これもなし。もう多分売れたのだとは思ふが、本屋が間違つてゐたら知らせてほしい。

近頃は午前中には北野へ〈写生に？〉行くが　午后からは眠つてゐる。眠るのが近頃での唯一の楽しみ。雪が降つてとてもうれし。雪景色も亦格別なものぢや。大塚先生へ行つたらよろしく。正月五日夜　掃風亭晨風拝

『水甕』二月号詠草。

ちまたへ原漢字〉かぜ冬のほこりをしらじらとふくみて速し曇天の下に

健康なる人をし憎む心ありともしと思ひしは昔なりけり

念々に不妊をなげく女（ひと）ありてほととととのふる灸すうるなり

評。　つよくうちだした処に魅力がある。

二　月　三　日　付、午後消印。はがき。

前略、　お能の事、大塚　岩見両先生　差支があつて行けないとのお便り戴いた。君の都合や如何に。

十九日（日）　正午后一時始。

勝手乍ら　なるべく早く御返事を願ひます。　とり急ぎ――草々不一

『水甕』四月号詠草。

松風にまぎれて其処に人の声柴折り敷きていこふ女ら

ひよどりの寒き音に鳴く山かげは日暮れて高し松風の音

見あぐれば松の梢のゆれつよし空には寒き風あるらしも

評。　調子におされてゐる気味はなきか。

四　月　四　日　　夜付。封筒が失われている。手紙。墨書。

拝啓　先日は御多忙中長坐をして失敬しました　お母様はその後は如何ですか　昨日　久高　大塚両先生の御宅へ伺ひ久しぶりで少し長くお話を承つて来ました　殊に久高先生では昼食を御馳走になり恐縮しました　主としてお能の話をしたのでしたが大変愉快で　気分がからりとしたのは嬉しく思つたところです　大塚先生は　少し痩せてをられ　何となく気分がくらく　失礼な言ひ方ですが　何となく痛ましい様な　影のうすい様な思ひがして　背中が寒くなり　泪が出さうになつたりして　弱りました

大塚先生の前に出ると何となく身がしまる様になり　一種凄壮な感に打たれるのは　或は小生だけの気持でせうか、

高林〈吟二・能楽師〉先生もちよつとそんな気持がする方ですが　もつと幽玄な気の方が勝つてゐるやうです

〈榊原〉紫峰先生はもつと凄いところがあり　形容枯槁　全く頭が上りません　口もきけなくなつてしまひます

小生のやうな人間が口がきけなくなるのだから　想像して下さい

〈小林〉柯白先生の前へ出ると　思はずおしやべりがしたくなつて　春の野で日なたぼつこをしてゐるやうな気になつてうきうきします。

大塚先生の事を書いたら筆が走つて　色々と書きましたが　実際　心配してゐます、

今日は　久しぶりで三時間半程も仕事が出来　とてもうれしいのです、仕事さへ出来れば毎日幸福なのですが健康の都合で出来なくなると悲しくなります　それに近頃　自信といふものが全然なくなり　他人ばつかり偉く見えて　嘆いてゐます、それも思ふ様に仕事が出来ないためかも知れません　そのてん　兄の健康に恵まれた事は　何にも勝る宝だと羨しく思つてゐます　しかし決して悲観はしてゐません　先日も話した様に　たとへ仕事が出来なくとも　当知是処即是道場へ妙法蓮華経如来神力品のことば〉で　それ程怠けてはゐないつもりです、仕事をしだすと本が読めません、絵を作る事は　相当な精神労動ですからぼんやりとしてゐます。又それが　非常に満ち足りたいい気持です。

何かしら書いてしまひましたが、近日又お目にかかりたく思つてゐるので返事は不要です、これから小生もぼつぼつ忙しくなります　兄も忙しくなる事と思ひます　しつかりやりませう　さよなら　十四年四月四日夜したたむ　枯魚学兄　晨風生

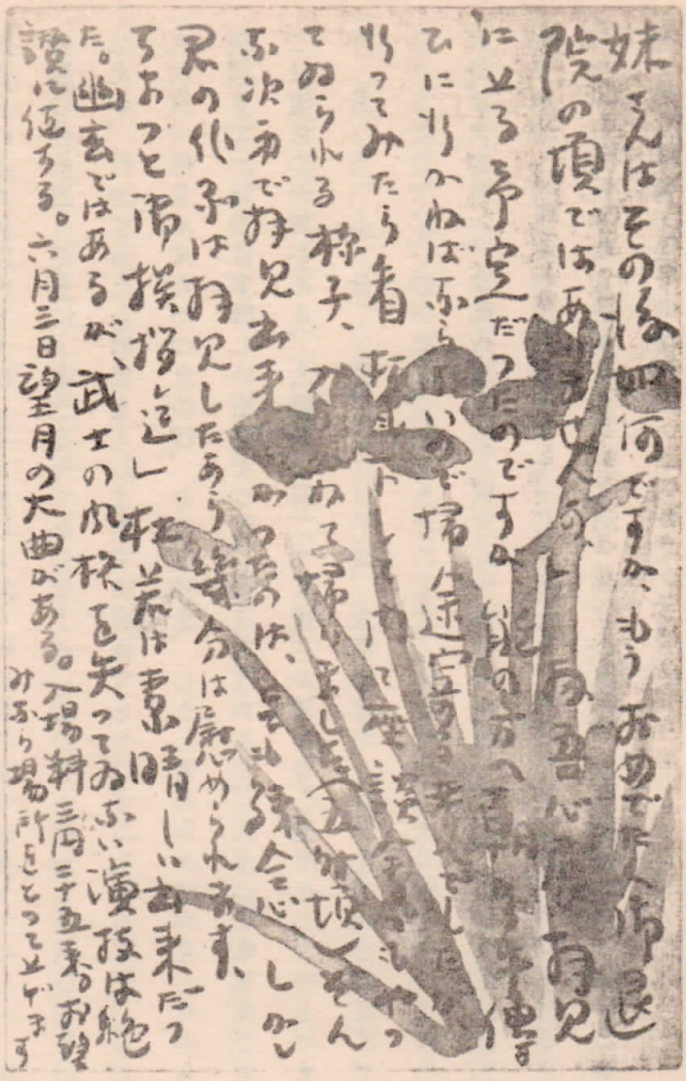
ふとさめて雨かと思ふ幻覚はしばらくにしてひそかなる夜や

五　月　一　日　午後消印。はがき。墨書。

お端書拝見、当日は吟二先生の杜若が最初で正一時に始るから　一時間半程だから四時迄には充分間に合ふ、是

界は前者程よくないから中坐してもいいだらう。杜若は随分立派なものだから都合がつけば観たがいい。本当に能が分つてくれるならば　金剛氏等とどれだけ違ふかよく分ると思ふ。恐縮乍ら折かへし御都合を知らして下さい、　不一

五月三日　付、四日午後消印。はがき。墨書。



妹さんはその後如何ですか、もうおめでたく帰退院の頃ではありませんか、吾心配に堪る事実だつたのです。能のかへりの日はいつでも帰途宜しかねばならぬ様に思ひます。

ひにかりかねばならぬ様に思ひます。

帰りてみたら看板、

てゐらるる様子、

ふ次第で御見舞

君の代子は御見

ちあつて帰撰挙迄」

た。幽玄ではあるが、武士の内様を矢つてゐる演技は絶

讃に値する。六月三日望月の大曲がある。

妹さん御病気との事色々御心配でせう　どうか養生専一に一日も速かに御全快お祈りします、（二十二三日頃から四五日水の尾へ泊りにゆきます）お能は大変残念です、しかし又秋にもある事故、その時観て下さい、時候がいいのに君も御心痛でせう、小生も二三日来描き過ぎて少々弱つてゐます、大した事はありません、草々。

五月九日午後消印。はがき。

妹さんはその後如何ですか、もうおめでたく御退院の頃ではありませんか、扨吾心展へ当時原田が約一年通つた書塾の作品展〻拝見に上る予定だつたのですが、能の方へ朝から手伝ひに行かねばならないので帰途寄る考へでしたが、行つてみたら看板も下して内で座談会でもやつてゐられる様子、入りかねて帰りました（五時頃）そんな次第で拝見出来なかつたのは、とても残念、しかし君の作品は拝見したから幾分は慰められます、ちよつと御挨拶まで」杜若は素晴しい出来だつた。幽玄ではあるが、武士の風格を失つてゐない演技は絶讃に値する。六月三日望月の大曲がある。入場料三円二十五銭。お望みなら場所をとつて上げます

六　月　十　七　日　　付、十八日午後、太秦局消印。はがき。「水のをにて　夜来童子」

色々な都合で延びのびになつてゐたけれども　昨日やつと水の尾へやつて来た。実にいい村で（実は市なのだが）画材は大変多い。歌材も随分ある様だが一向歌心が湧かない。ただ部屋にねころがつて、鶯の声を聞いたり　頬白や鵯鳥　又は渓流の河鹿の声を楽しんでゐる。来る道三十五丁で相当悲鳴を上げたのでまだ少し疲れてゐる。シャンとしたら歌も出来るかも分らぬ。朝夕は寒い。日中も暑いが京都程の事はない。もう四・五日遊んで帰る。長くなると薬がなくなる。

『水甕』七月号詠草。

一銭の銭も我が得ぬことさへや考へしことつひになかりき

牝鶏が静かに一羽動きゐて障子に白き陽の光かな　洛北

草屋根の甘き香を身にしめて庇を深く我立ちにけり

麦の花咲くべくなりし草いきれ畦を伝ひて人呼びにけり

八　月　八　日　　午後消印。はがき。墨書。「松風童子」

毎日暑いのが続くが仕事の方は如何ですか　全く酷暑に弱い小生乍ら　この頃は呆然ともせずいささか勉強をしてゐます、〈原田の仕事は、たぶん、冷泉為臣氏の『明月記索引』作製の手伝いだったろう〉

兄の仕事が忙しくて　春のことぶれ〈釈超空の歌集〉読む暇がなかつたら先に大塚先生に見せてあげてくれないか、矢張りお見せしなければならないのだから

小生の幼少よりのごく親しい友人出征して何となく気が落ちつかぬ、まだまだ戦争はこれからだと思ふ、前、喜多流には孫次郎を使はぬと言つたかと思ふが　これは失言につき訂正します　孫次郎は小面ナリ品が落ちる。乱筆多謝

八　月　十　日　　午後消印。はがき。

今朝お端書拝見。春のことぶれは　どちらでもいい。君の都合のよい方にして下さい。当分は読む間がないから。大塚先生へ廻す時はすみませんが表紙を紙で包んで置いてくれませんか、お願ひします。まづ二年はお借へママ〉ししなければならないだらうから。もし先生が先にみたいとおつしやつたら、読了せられた時分に兄がとりに行つて下さい。さうしたら早く帰つてくる。

実際あの歌集中には千古の絶唱が数首あつて心臓が止まるやうな思ひがする。ああいふ歌を身辺に置いて楽しめる我々は本当に幸福だ。

武田祐吉氏「女人万葉」を読まうと思つてゐる。松風童子

〈わたしたちは、当時、釈氏の歌や学問に傾倒し、その著作をさがしまわっていた。いずれも手に入れにくく、『春のことぶれ』などは発売と同時に売りきれた、といったうわさであった。森田君の入手したものは古書店で定価の数倍のものだったはず。このときわたしは森田君から借りて筆写中だった、と思う。その筆写本は今でも手許にのこっている。釈氏、すなわち折口信夫の全集が文庫本で買える今の人には、当時のわたしたちの心情は想像しにくいかもしれぬ〉

『水甕』九月号詠草。

水の尾の初夏

静かなるこの起き伏しを楽しみて山菜くひつつ七日経にけり

朝夕に谷のたぎちを聞き澄みてこの山里は住むべかりけり

古の帝もここに朝な朝な潮音さぶしと聞きましにけん

杜鵑こゑちかぢかとひとところ晴れゆく山の朝霧ふかく

山の子は水を浴びると現身の裸となりて声あげにけり

陵（みささぎ）の椹の古木ゆ落つる露のしばしばなれば雨かと思ふ

評。　無心有清〈ママ〉。

十月十日　付、午後消印。はがき。墨書。

お便り拝見、大塚先生へは是非お供をしたいといふ端書を差上げてをヘママ〉いた、多分行くことにならう、〈岡本大無氏の〉草衣社では何も活躍してゐるのではない、この頃は欠席ばかりしてゐるが、会場を頼まれたので一肌ぬいだだけ、

十七日は梅若万三郎の松風　桜間金太郎の邯鄲、すばらしいものばかりで、今からワクワクしてゐる、一度夜でも拝顔に伺ふかも分らぬ、コレハ例ニョッテアテニナラヌ、それから一度法金剛院へ連れて行つてくれないか、十万上人の遺跡と聞けば百万を思ひ出してなつかしい、岡島君云々は何のことか分らぬ、同君の名前は聞いたこともない、〈岡島とは、三中の同窓でこのとき出征か何かだった、と思うが、今では不詳〉

『水甕』十一月号詠草。

祇王寺

おとなへど応（いら）へもあらず竹藪をさ渡る風のひそかなる寺

赤松葉落ちてこぼれて草屋根にここだ朽ちたる色あはれなり

落柿舎

尋来し屋根はあれかと近づくに柿の古木のまづ見えそめぬ

竹筒に冷えし麦茶を庭先よ礼（いや）して受けぬ汗のごひつつ

竹藪に竹きる音の響きをり野の宮近く道ふかまりぬ　野の宮

竹藪は陽を通さずも立止り手打てばふかし幹にひびきあひて

行香子 ―李清照（一五）―

原田憲雄

草に鳴くきりぎりす／驚き落つるあをぎり／げに人の世も／天上も愁ひぞふかき／雲のきざはし月の地／千重にとざさる／いかだ寄り来／いかだ去り／あひあはず／／星の橋かささぎの駕籠／年へてのからき逢ふ瀬／離れすむこころおもへば／恨めしさかぎりなし／彦星　織姫／いまや別るる／ややしばし晴れ／しばし雨／しばし風

「行香子」は双調、六十六字、前段五平韻、下段四平韻の短かい詞。字数は六十四、六十八、六十九字といったものもある。蘇軾が七首作っていてこの詞調では古い。李清照の作は一本に「七夕」と題する。

草際鳴蛩。驚落梧桐。　Cǎojì míngqióng; jīngluò wútóng.

秋の景色としてはありふれたものだが、cǎojì の音調には露を帯びて乱れる草むらが、míngqióng には涼しい虫の音が幻のようにあらわれる。そうして、jīngluò wútóng には、ばさと落ちるあをぎりの葉が。「きりぎりす」と訳した文字はコオロギ、マツムシ、スズムシなど秋鳴く虫のすべてをさした。óng (éng) ōng (ēng) の音を最後にもつのがこの詞の韻字。

正人間、天上愁濃。　Zhèng rénjiān tiānshàng chóu nóng.

これは一句だが、「人間」と「天上」の間がすこしとぎれる。このような小休止を「逗」という。句読点の読と同じ意味だ。人間と天上については、本稿の初めの「南歌子」で説いた。そのほか南唐の後主の作にもこの対

語を使ったすばらしい作があった。

『雲階月地，關鎖千重。　Yúnjiē yuèdì, guānsuǒ qiānzhòng.

前の句は晩唐の杜牧の「七夕」と題する次の詩を本歌とするのだろう。

雲のきざはし月の地にひとたび逢ひて／年経ぬに別れ居のつらさぞ多き／さてもつらきはあすの朝車軸の雨に／越すにこされぬ天の河かも

雲階月地にはきらびやかな天上世界がほうふつするが、guānsuǒはそこに住む恋人たちを千重の鉄のとびらで断ちきるむごさが響く。

縱浮槎來，浮槎去，不相逢。　Zòng fúchá lái, fúchá qù, bù xiāngféng.

「いかだ」については張華『博物志』の記事を引いて説明するのが常で、今更とも思うが、ともかく。

天の河と海とは通じているとの伝えがある。近ごろ海辺に住む人が、年々八月きまつていかだの来るのを見、その上に小屋をつくり食料をのせ、十日ばかり行くと、着いた処に宮殿があり、織姫がたくさんいた。男が水際にやって来て牛に水を飲ませていたが、いかだの人を見て驚き、どうしてやってきたか、とたずねた。いかだの人がわけを話し「ここはどこですか」と問うと、「帰って蜀郡の厳君平に聞けば分るだろう」と答えた。で、岸に上らず、帰って厳氏にたずねると、「これこれの年月日に、客星が牽牛星座を犯した」といった。数えてみるといかだの人がちょうど天の河についた時だった。

ただ、この詞では、いかだは、彦星にあいにゆく織姫の乗る舟という仕立てになっている。世の詩歌のおおむ

ねがそうで、場合によっては彦星と織姫を入れかえる。そこのところは全くありふれた七夕だが、zòng rúchá lái には織姫がかよわい身で小舟にのってはるばると波にゆられてやってきたあこがれがたゆたい、rúchá qù には、もうすこしでとどこうとする舟が、まきかえす波にさらわれ、岸に着かずに離れてゆく、たよりなさ、もどかしさが、たくみに描かれ、bù xiāng féng で、恋人の姿を見ながら手もとらずに別れてゆかねばならぬつらさが、読む者の心にしみる。以上が前段。

星橋鵲駕，經年才見，　xīngqiáo quèjià, jīngnián cái jiàn,

七月七日、烏鵲が橋をつくり、そこで牽牛と織女が会う。橋を星橋とも烏鵲橋ともいう。かささぎのかご、と訳したが、きまじめに「かご」ととることはいらぬ。中国の詩文のこのような飾りことばは、科学的事実とはほとんどかかわりがない。といってその飾りを無視しては詩が成りたたぬ。詩は、翻訳を許さぬのがその本質だろう。承知の上でするその無理の中でどの程度原詩の飾りを生かしながら、日本語の訳文にもとの味わいを導きこめるかが、訳者の冒険である。ひとさまのためには恐らく何の役にも立つまい。ただ、外国の詩を読むためには目で読み心で味わうだけではとどかぬところまで、この作業がわたしを連れていってくれるような気がする。翻訳という空業を、いまなお捨てないのは、そのよろこびにひかれてのことなのである。

さて、経年才見、とは、一年たってやっと会える日が来たのだけれど、というほどの意。「見」の場所は、普通なら韻字をはめこむところだが、彼女はここで韻をふまない。このふみ落としは、次の句への微妙な移りゆきを熟慮した上での決断に違いない、とわたしは思う。

想離情、別恨難窮。　xiǎng líqíng biéhèn nánqióng.

離れていた間のつらさをおもうと、会っているときにも、まもなく別れねばならぬ悲しさが限りない、というのであろう。「難窮」を「無窮」とする本がある。意味の上ではかわりはない。

牽牛織女，莫是離中。　Qiānniú zhīnǚ, mòshì lízhōng.

逗を含んだ前の句から、牽牛の句に移る際、普通の句と句の間よりも長い休止をおかねばなるまい。二句の意は、牽牛と織女が、いまや別れようとしているのではなかろうか。

甚雲兒晴，雲兒雨，雲兒風。　Shèn shár qíng, shár yǔ, shár fēng, ……

こんやは、ほんのちょっと晴れたと思ったら、すぐ風が出て、そして雨がぱらつきはじめて……というのである。前段の末の三句と相応じ、さらにデリケイトな結びの三句である。

「行香子」は初めにいったように後段四韻が定格だが、彼女のこの作は、窮・中・風の三平韻。その破格が、この末三句の微妙をむかえる準備であった。三句の「雲」字の上に「一」字を加える本があるが、わたしはとらない。

各句にそえた発音表記は、いまの中国の標準音で、もとより李清照の時代の音ではない。こんな表記をそえることを笑う専門学者のいて、笑う理由ももっともであることも、知らないではないが、いわゆる読みくだし文をそえてすましているよりは、詞を読むのに助けになろうか。音楽は演奏会に出かけて行って聞くのがいいには違いはないが、出かけていけない人が、傷だらけのレコードで楽しみ、感動しても悪くはない。　十月四日。

ランカーの岸辺で（一）

原田憲雄

序詞

ランカーの岸辺／で　童女に／逢った／しびしび／雨／ふり／昏れかけていた／／風ふきはじめた鉛の海／にむかって佇った／童女／が　ふいに　ふりむいた／顔に　目が／なかった／／目をうしなった童女／の顔は／海より暗い内部／を／見ていた／波すさぶ海／の／内部／と外部の／境／の岸辺／ちいさな舟／が　つないであった／わたしは／童女／を／舟にのせ／ともづなを／ほどいてやった／／昔　わたしは／おまえによく似た／童子に／やっぱりここで／であった／童子／は南へ／船出した／／あいつは／善財童子といった／おまえはあいつ／にそっくりだ／おまえは／あいつの妹　だろう／それならおまえは／善財童女／か／／童女よ／おまえも／さまようがいい／鉛の海／が／紺碧に輝く日／まで／はるかに／南へ

スリランカ

ランカーは、いまのスリランカ、かつてセイロンとよばれた島国の古い名である。インドの南端とポーク海峡をへだて、北緯六度から一〇度に南北に横たわり、面積六五、六一〇平方キロメートル、わが九州と四国を合わせた広さにほぼ等しい。この国を初めて見る印象を、そこに旅した一人は、次のように記す。

空から見たスリランカは、真青な海の中に白く泡立つ波打ち際がくっきりと浮き出た緑の島である。たいして大きくないのに、この島に人間が住み始めてから二五〇〇年以上にもなる。空から見るかぎりではそんな感じはまったくない。緑の中に、小さな湖が点在し、自然だけがそのまま残っているように見える。…（首都）コロンボから一歩郊外へ出ると、花と緑に囲まれた村落地帯である。南国特有の色鮮かなブーゲンビリアやヒマワリが咲き競い、カッコウやカワセミ、サギなどが美しい歌声を聞かせてくれる。国道のかたわらではオオトカゲが午睡を楽しみ、子供たちが野猿と遊んでいる…ある雨の日…山道を走った。…人っ子ひとりいない灌木地帯だった。ここは、まさに動物の天国である。クジャクが大きく羽を広げて愛を求め、母鹿が子鹿に餌のとり方を教えている。キツネが四頭、さも迷惑だといわんばかりの顔つきで、こっちをにらみながら森の中へ消えた。…（深井聡男『スリランカ』一九八〇年）

いま一人のひとも次のように描く。

飛行機の窓からみおろすと、まるで緑の織物を広げたような一面の椰子の密林が広がっている。広漠とした荒野がつづいているインド亜大陸の風土とはひじょうな相違である。そこは、インドの南のはてにある緑の島セイロンである。八月であったが、着陸してみるとケ方でも案外暑くなかった。色濃く、あざやかな南国の樹陰は、なにかしら人をつっこい親しみが感ぜられた。…（中村元『ガンジスの文明』一九七七年）

中村氏はつづけて説明する。

セイロンは、第二次大戦後独立して、現在の正式の国名は、シュリーランカー（Sri-Lanka）である。それ

はセイロン国民の大部分を占めるシンハリー族の民族主義的意識にもとづいて、以前のセイロンという国名を改めたのである。「シュリー」とは「めでたい」「吉祥」という意味であり、「ランカー」はインドやセイロンの古典に出てくるこの国の古名である。（この名は日本人にも無縁ではない。禅宗でよく依用する「楞伽経（りょうが）」の「楞伽」はランカーの音写であり、ゴータマ＝ブッダがこの島国にきて教えを説いた、その教説をしるしたもの、ということになっている。）

スリランカといい、シュリーランカーというのは日本での表記法がさまざまであるということで、同じ国をさす。わたしは、今の国名としては「スリランカ」を、古名としては「ランカー」を使うことにする。

さて、わたしが「ランカー」の名を知ったのは、「楞伽経」によってであった。そのときは、しかし、禅宗で用いる経だとは気がつかなかった。五十年前、まだ中学生だったわたしは偶然、中国唐の詩人李賀（七九一―八一七）の詩集を手に入れ、次のような句にぶつかった。

長安有男子　長安の都に青年がいた
二十心已朽　二十歳　心はとっくに朽ちはてた
楞伽堆案前　楞伽経　机の上にうづだかく
楚辞繫肘後　楚辞を手近かにおいていた

（「贈陳商」陳商くんに贈る）

李賀は、奇異な美しさをもつ約二百五十首の詩をのこし、数え年二十七歳で夭折した。「鬼才」ということばはこの人のために作られたのだ、という。戦前はごく限られた人にしか知られなかったが、いまでは日本語、英

語の全訳があり、研究は数しれず、流行作家の作品にもしばしばとりあげられる。ことに「長安有男子、二十心已朽」は有名で、さきごろ自殺した三島由紀夫が愛誦していたし、ついこのごろ若い友人にすすめられて読んだ大原富枝氏の小説『地籟』にもこの二句がはめこまれていた。

かれは、一般に、感覚的な詩人と見なされる。たとえば芥川竜之介が好んだ「将進酒」

琉璃鍾
琥珀濃
小槽酒滴眞珠紅
烹龍炮鳳玉脂泣
羅幃繡幕圍香風
吹龍笛
擊鼉鼓
皓齒歌
細腰舞
況是青春日將暮
桃花亂落如紅雨
勸君終日酩酊醉
酒不到劉伶墳上土

琉璃の杯に
琥珀は濃ゆし
小槽より酒のしたたりて　真珠　くれなる
竜を烹き　鳳炮げば　玉の脂は　すすり泣き
羅の幃　繡の幕　香はしき風を　囲みぬ
竜笛を吹き
鼉鼓を撃ち
皓歯　歌ひ
細腰　舞へり
いはんやこれ　青春の日は　暮れぐれに
桃花　乱落　紅雨なすをや
君に勧めむ　日もすがら　ただ酔ひによへ
酒は到らず　劉伶が墳の上の土

あるいは次の「傷心行」

咽咽學楚吟
病骨傷幽素
秋來生白髮

むせびつつ楚のうた学び
いたつきのむねしひたげぬ
身は秋の髪に霜おき

木葉啼風雨　あめかぜに啼く木の葉かも
燈青蘭官欹　燈青くあぶらは欹きて
落照飛蛾舞　蛾の舞ふにほのほかげりぬ
古壁生凝塵　ふるき壁に塵つもり
羈魂夢中語　ゆめにだにふるさとを恋ふ

などにはその傾向が伺えないわけではない。かれの詩集をひらくと、宝石箱をぶちあけたといった印象がまず来る。ルビー、サファイヤ、エメラルド、色さまざまな硬質の珠玉がこぼれ散る。エキゾティックな、怪奇な字面がまばゆく、濃厚な憂愁の糸がそれらの玉をつらぬき繋いでいる。キーツやシェリー、ボードレールやランボー、さてはロートレアモンにたぐえる人もあるほどだ。少年のわたしがかれにひきつけられたのも、そのような美しさに魅せられたためだろう。ボードレールやランボーの詩に感覚的な要素がいちじるしくても、かれらは単なる感覚をもてあそぶ詩人ではなかった。李賀の詩もまた、感覚的といってしまえないものをもつように思ったのであろう、わたしはその作品を読むために大学で支那学を専攻した。一九四六年復員したのちもノートにかれについてのメモを書きつけていた。一九五二年五月三日のメモに「蹭陳商」三十四句の二十四句までを翻訳している。「長安有男子、二十心已死」にたちどまっておれなくなって、かれをつきうごかす楚辞や楞伽の世界にさまよいいろうとしていたのだろうか。

〈一九六六年「楞伽」を、一九七四年「世尊と夜叉王」を書いたが、一九八三年十月十九日からサンスクリットのテキストを参照しつつ楞伽経を読み直している。これはそのメモ。いつまで続くか分らぬが。（十月五日）〉